

Living device

Step up 「あたらさん」的 生活考

【あたら 可惜】とは「もったいない」の古語で「あたらしい」の語源になったといわれています。【あたら＝もったいない】に【さん＝SUN＝太陽】の恵みをプラスして、さまざまな情報を発信しています。

あるがままの自然をいかして —— 乗客の心に寄り添う「山野草の駅」——

大正12年生まれの人（信濃追分駅）は、駅舎やホームの待合室もほとんど当時のまま。標高955.6m、国内の私鉄では一番、国内では標高第2位の高原の古駅です。

駅開業の10月は関東大地震のあった翌月で、命からがら故郷に向かう人々が浅間山の見えるホームに降り立ち、草花を愛で「乗車時間だとせかしても、花の前で動かなかった。」と語る、当時の駅員さんの話も記録されています。

その頃から、駅の草花は乗客の心に寄り添い、ひとときの癒しとなって咲いていたのです。私自身も子供時代、上野駅から父に連れられヤマユリや月見草の咲く駅に到着すると『これが高原の匂い！』と深呼吸したものです。

国鉄の民営化にともない、しなの鉄道に移管されてからは人手もなく、除草剤が撒かれ草花は姿を消しました。

駅舎に編集室を設置したとき、数本の木が残るだけになったホームを眺めながら、山野草が咲き香る、かつての駅を取り戻そう！と、次世代に渡すための活動を地域の有志と開始。追分ゆかりの作家・堀辰雄の愛した「野ばら」を雑木林から何十本も移植しましたが、除草剤が堆積する土に根が到達するやいなや、みるみる枯れるという悲劇も。

10年以上を経て土も元氣を取戻し、自生してくる草花も増えました。あるがままの植生（雑草!）を活かしながら、お気に入りの山野草や花樹で彩りを添える「あたらさんの庭造り」。大金をかけずに「山野草の駅」が実現しました。



冬は雪の浅間山を背景に、バラの赤い実が映える。12年前、上下ホームに有志と植えた「野ばら」は11本生き残り、6月には白い花がたわなに咲き、芳香が漂います。



上下ホームの植栽部分に樽プランターをシンボリックに置き、高原特産の「花豆」を育てています。江戸時代に観賞用として中国から渡来した植物とあって、赤い花が見事。

那須 由莉：らびす舎・代表

多くの家庭実用書や生活情報誌の編集に携わる。2005年『暮らしの手帖別冊・あたらさん』の編集長として、創刊と同時に「しなの鉄道・信濃追分駅」駅舎に「あたらさん編集室」を設置、別冊の休刊後も継続して駅舎を借り、2021年まで運営。「もったいない＝あたらさん」の知恵と心をコンセプトに、編集・制作と創作活動続ける。信濃追分駅『オオヤマ桜を守る会』、軽井沢・借宿『ピオトップKBS』のメンバー。